



ある朝、大造は窓から聞こえてくる鳥の音で目を覚ましました。

「いつもは勝手に起きるのに、こんな時間まで寝てるなんて俺もヤキがまわったかな」

大造はそう言いながら寢床からおり、三歩進んだ台所兼作業場の天井から吊るしてあるヤマドリを外しました。すでに熱湯につけられて羽根をむしってあるそれを、板の上において、出刃包丁で腹をさばき手際よく内蔵を抜いていきます。水で中を洗った後、大造はちょっと考えてから刻みネギと、岩塩と、挽いた胡椒をまぜてヤマドリの腹の空洞に塗り、ゆうべ残った飯をぎゅうぎゅうに詰め込みました。

大造は、できあがったぱんぱんのヤマドリに笹を巻いて、鉄板に乗せて、鑄物のストーブに入れて火を起こすと、猟銃をつかんで小屋の外にでました。

顔を洗った後に山を一回りしましたが、兎が罾に掛かっていた以外は何の獲物も見つかりませんでした。

大造は兎をさっきまでヤマドリをつるしていた鉤にひっかけると、猟銃を箱にしまい込んで鑄物のストーブを開けました。じゅうじゅうと音がして、煙と、溶けた脂の焼ける匂いが小屋中に立ち込めます。

大造は出刃包丁でヤマドリを骨ごと輪切りにしました。パリパリと皮がめくれ、中から肉汁があふれてきます。一口噛み付こうとして、ふと大造が顔をあげると、小屋の入り口に犬がお座りをしていました。

「なんだ。お前にやる飯はないぞ」

犬は全く気にしない顔でへはへはと大造を見つめ、手にしたヤマドリを見つめます。手にしたヤマドリから肉汁がぽた、ぽたと垂れ、犬の口からもよだれがぽたっと垂れました。

「ああ、もういいから食え。熱いぞ」

大造は一切犬に投げてやりました。犬はあち、あちというように皮をくわえては引っ張っています。犬が一つ食べる間に大造は残りを全部食べ、犬がかじろうとしていた骨を取り上げて畑の穴に埋めて土をかぶせました。

「鶏の骨はだめだ。破片が口にささるからな」

犬の尻尾がしょんぼりしているのを見て大造が話しかけます。

「お前には代わりにこれをやろう」

そういつて、大造は太い縄の切れ端を結んだものを犬に差し出しました。この間、猪をゆでた時

の汁につけてもう一度煮詰めたものです。犬はそれをあぐりとくわえるとどこかに走って行ってしまいました。

「あいつも猟犬らしいが、どこから流れてきたんだらうな」

「お互い、流れ者の身か」

大造はそう呟くと、腰を下ろして銃の手入れを始めました。

大造は、三丁のGUNを持っています。片手に収まるほどの小さな6連発の拳銃と、元込め式の二発だけ弾を込められる猟銃と、残雪です。

残雪というのは、その最後の一丁のGUNに付けられた名前です。ものすごく巨大な銃で、長さも重さも子供くらいありました。左右のマズルブレーキに一か所ずつ、真っ白なペイントをもっていたので、前の戦争の反乱軍たちからそうよばれていました。

そのペイントは、おんみつさくせんでは目立つというので上官はつねづねいまいましく思っていました。さくせん行動の度にそれとなく大造に塗りつぶすかカバーをするようにいったのですが、大造は決してゆずりませんでした。

長くてみじかい戦争が終わったあと、大造は山奥に入って行って猟師になりました。

しかし、その戦争で「白い死神」という名前が付けられた大造のもとには誰も訪ねてくる人はいませんでした。ただ、どこかから流れてきた猟犬だけが、大造の小屋の回りに住み着いては、たまに一緒に食事をしたり、猟にくっついていっては鳥をとったりしていました。大造は、すっかりじいさんになってしまった今も、いつものように猟銃でシカやヤマドリを撃っては生活していました。

ちょうどその冬、村を襲う人食い熊がひとびとのうわさにのぼりました。開墾中の畑に立った炭焼き小屋を襲ったり、食糧小屋を荒らすというのです。

おおぜいが山がりに参加しましたが、人間の匂いをかぎつけた熊はすぐに山奥にのがれてしまうので捕まえ様がありませんでした。山中を囲んで追い上げたこともありましたが、煙のように熊は消え失せてしまうのです。しかも、こちらの村を襲ったかと思えば、何十里も離れた村をすぐ後に襲ったりして、その居場所は杳としてしれませんでした。

しばらくすると、人間の味を覚えた熊は、ついにはその熊に殺された人たちの葬式を襲うようになってしまいました。返り血を浴びて真っ赤になったその頭の様子から、その熊は「赤頭」と名付けられました。

10人を超える人間が熊に食われて死にました。

そんなある日、大造は犬が吠える声で目を覚ましました。外に出てみると、一羽のハトが軒先にとまっていた。

大造は、ハトを両手で包み込むようににして持ちあげました。よく見ると、ハトの足に小さな筒がくくりつけられています。その中の紙には、熊を倒してほしいとの依頼文と、報酬額が簡潔な文章で記されていました。

大造は用意を整えると、赤カブトの縄張りに入り込みました。そして、前に捕まえた鹿の皮を剥いで木につるしました。

そこで、夜の中に、その木より少しはなれた所に小さな小屋を作って、その中にもぐりこみました。そして、ねぐらをぬけ出して、この鹿のにおいをたどってやってくる熊を待っているのです。

赤カブトは、...ふと、いつものえさ場に、昨日までなかった小さな小屋をみとめました。

さらに、そちらからただよってくる、にんげんのにおい、それに交じった鋼鉄と火薬の匂いをかぎとりました。そのまま、きびすを返すと、熊は去っていきました。大造は「今回はおれの負けだ」といってヘルメットをはずしました。

大造はそれから一週間、赤カブトの足取りを詳細に調べました。その周辺の天気、風向き、気温、湿度、そして、狙撃に必要なポイントを入念に探しました。今度は、熊に匂いがとどかない距離、それも超長距離射程からの狙撃をおこなうつもりなのです。

大造は、前に赤カブトに襲われて死んだ人たちの墓を目印にし、そこから半里近くはなれた山の中腹に穴があるのを見つけてそこに入り込みました。

監視を始めてから3日目、雪がしんしんと降り始めました。大造は純白のギリースーツを身にまとい、穴から出て伏射の態勢を取りました。すこし離れるとそこには雪の盛り上がりがあるようにしか見えません。じいさんはシモ・ヘイへの言葉を思い出していました。（練習だ）（練習だ）（やれると言ったことを）
「行こう、ただそれだけだ」

その時、スコープ越しに黒い影が現れました。赤カブトです。人々の血を吸ってきた頭の毛皮が黒く固まったように変色しています。熊は墓の盛り上がった土を嗅いで、掘り起こそうとしています。

じいさんの耳にいつものように標定をする残雪の音が聞こえました
（距離、1700、南西1m、気温変化なし、目標速度変化なし）

大造は息をゆっくり吸いながら残雪のコッキングレバーを引いて、戻しました。薬室にリップクリームを塗り、筒よりふたまわりは大きい弾丸が送り込まれます。

じいさんは、会心のえみをもらいました。

（残雪、今いくぞ）

じいさんは息を吸って、半分はくところでき、トリガーを引くのに必要な数十グラムの力を人差し指に加えました。

その瞬間、マズルブレーキから爆発的な排気が発生し、あたりの雪を後ろにむかってまき散らしました。

その瞬間、残雪から放たれた12.7mmの弾丸は右回りのモーメントを与えられて驀進し、2秒後に1700m先の赤カブトの胴体を真っ二つにしました。

弾着を確認しようと身を起こした大造の視界が暗くなりました。

目の前に、今撃った熊と同じほどの大きさの熊が立ちふさがっているのです。

「つがいったのか！」

バレットM82はセミオートです。連射が可能な対物ライフルです。しかし13kg近いその重量をとっさに目の前の高い位置に持ち上げるには、大造はあまりにも、あまりにも歳をとっていました。

雌熊の一撃を脇腹に浴びて大造の体は枯葉のように吹き飛びました。防刃も兼ねたギリースーツのおかげで肉は裂けていませんが、肋骨が何本か折れました。

じいさんの薄れる視界で、熊がこちらに突進してくるのが見えました。

「11時に3人、距離720」

聞きなれた残雪の声でじいさんは我に帰りました。今までの雪景色はどこにもなく、てりつける日差しと砂漠の砂っぽい風がじいさんに吹き付けます。

「大造、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ、弾だけはあるしな」

孤立した砦で、大造と残雪は四方八方から迫ってくる軍隊を撃って撃って撃ちまくっていました。この砦に残っている核燃料を回収しにヘリ部隊が到着するまで、この砦は落ちてはいけません。すでに周囲には仲間の死体が転がり、足元は葉きょうで転ばないようにするのが大変なほどです。

何時間たったか、大造は全くの感情を入れずに撃ちまくり、残雪はそれを淡々とカウントし続けました。残雪のノートは鉛筆と汗でぐちゃぐちゃになりました。

ついに、遠くからヘリの機影がみえ、爆音が少しずつ近づいてきました。そのとき残雪が叫びました。「対空ロケット砲だ！」ヘリを狙い撃ちする気なのです

大造は指示に従ってロケット砲主を狙います。しかし、もう一発がこちらへと向かってきました。大造はとっさに身を伏せます。爆炎が収まると、残雪が血まみれで倒れているのが見えました。

「残雪！残雪！しっかりしろ！今ヘリが来る」

「大造...撃ってください。撃って、撃って撃って」

「なに言ってるんだ！とりあえず止血するんだ」

傷口をしばろうとした大造の手を残雪がつかみます。ものすごい力です。

「時間がない。まだロケットランチャーがあります。核は渡せない」

もう一方の手で残雪は大造の巨大な銃を、銃の銃口を握ります。じゅう、という肉の焼ける匂いがして煙が上がりました。

「早く！」

大造は撃ちました。先端のマズルブレーキに血の手形のついたバレットM82で。撃って撃って撃

って撃ちまくりました。気が付いたときにはヘリで大造は輸液を受けていました。

そして、戦闘がもう終わったこと、そして、自分が相棒を失ったことを知ったのです。

それから大造は、自分の銃の先端を白く塗りつぶし、軍隊をやめ、行方をくらませてしまいました。特殊戦闘の軍事教練をしていたとも、傭兵をしたとも言われています。

大造じいさんが目を開けると、まだ熊が迫ってくるころでした。

！？

じいさんは目の前のGUNを、残雪をつかむと両手で持ち上げました。

12.9kgのその戦車の装甲をも打ち抜くという巨大なライフルは、軽々と持ち上がりました。

まるで、羽根でも生えているかのように。

大造じいさんが熊をまっすぐにみて引き金をひくと、劫火とともに吐き出された弾丸は熊を赤い霧に変え、そのまま天高く飛び去っていきました。

じいさんは残雪を取り落とし、その上に倒れこみました。

気がつくと、銃声を聞いた村人に助け出され、大造じいさんは小屋に寝かされていました。

雪が溶けて春が来るころ、歩けるようになった大造じいさんは、熊を倒したところにいきました。残雪は錆びて、その場所にまだありました。トレードマークの白いペイントも、わからなくなっていました。

錆びて茶色になったそのGUNを、大造じいさんはその場所に埋め、二度と再びGUNを手にする事はなかったということです。

おしまい